



特定領域研究

実験社会科学 ニュースレター

2012 年 11 月 30 日
第 8 号

この号の内容

1. はじめに
2. 「文化班での研究と成果」
文化班 山岸俊男先生
3. お知らせ
4. 編集後記

1. はじめに

特定領域「実験社会科学」ニュースレター第 8 号では、文化班で行われている研究内容の一部を、ご紹介させていただきます。文化班では、山岸俊男先生(玉川大)を代表として、内田由紀子先生(京都大)、石井敬子先生(神戸大)、清成透子先生(青山学院大)を研究分担者として、人間の本質的社会性が、異なる制度への適応を促進するための「文化・心理的道具」として働いていることを明らかにすることを目的として、実験研究が行われております。

本号では、山岸俊男先生にご依頼して、現在の研究等につきまして、ご紹介させていただきます。

2. 「文化班での研究と成果」

文化班 山岸 俊男 先生(玉川大学)

一般サンプル実験データの蓄積

文化班の活動の一つに、文化心理学で扱われている行動、認知、動機づけ、知覚などの文化特定性についての調査・実験研究と、経済ゲームを用いた実験研究との接合をめざす、「一般サンプル実験」がある。文化特定の心の働きを人々の信念と行動が生み出す社会的ニッチへの適応のための「心の道具」として捉える、文化への社会的ニッチ構築アプローチないし制度アプローチでは、経済ゲームとして特定された誘因構造に対して人々がどのように反応するか、そしてそうした反応が特定の誘因構造への反応を促進すると考えられる文化特定の心の働きどのように関連しているかを明らかにする必要がある。そのためには、同一の研究参加者に対して複数の経済ゲーム実験に参加していただくと同時に、複数の文化的行動・認知実験や心理尺度に答えていただく必要がある。文化班では、こうした目的に向けたデータベースの作成をめざして、2007 年から「一般サンプル実験」を開始した。以後 4 年の歳月をかけ、ワンショット囚人のジレンマ、繰り返しワンショット囚人のジレンマ、最小条件集団を用いた集団内間囚人のジレンマ、社会的ジレンマ、信頼ゲーム、信仰ゲーム、独裁者ゲーム、最後通告ゲーム、鹿狩りゲーム、先制攻撃ゲームを実施した。

"一般サンプル実験！?"

"公開データベースの作成
を目指す！"

これらのゲームの実施は、ゲーム間での選択のキャリーオーバー効果の発生をなるべく減らすため、それぞれ数カ月の間隔をあけるかたちで 8 次にわたり行われた。その間、同時に、これまで文化心理学者らにより実施されてきたペン選択実験、場依存的表情判断実験、主題背景判断実験、作り笑い検知実験、自己高揚・自己卑下実験を実施し、場依存独立テスト、埋め込み図形テスト、各種自己観尺度、各種集団主義・個人主義尺度、各種カテゴリー判断テスト、内的・外的帰属尺度、プリベンション・プロモーション尺度、間人主義尺度、Guanxi 尺度、中道判断テスト、各種社会的スキル検査などの文化関連の心理尺度を測定した。加えて、IQ 検査、ビッグ5パーソナリティ検査、感情パーソナリティ検査、感情的知能検査、社会的価値志向性検査、自閉症スペクトラム検査、各種リスク回避尺度、社会的リスク回避尺度、各種サイコパス尺度、アレクシサイミア尺度、各種不安感尺度などの心理検査・尺度測定や、数次にわたる一般的信頼観尺度、数次にわたる用心尺度、泥棒尺度、相互依存性尺度、社会的支配志向性尺度、統制志向性尺度、マキャベリ尺度、共感性尺度、社会的命題尺度、自尊感情尺度、人生満足度尺度、私的公的自己尺度、F 尺度、ドグマティズム尺度などの態度尺度や心理尺度などを測定した。また、参加者から採取した唾液を使って複数の内分泌物質の測定を複数回行った。8 次にわたる研究は、それぞれ4時間から6時間ほどにわたり、半日ないし1日を要した。第1次研究は札幌市北区から新聞折り込み広告を用いて募集した男女ほぼ半数の 106 名の参加者をもって開始し、実験インストラクションの理解に困難を生じた参加者を除き、これらの参加者のうち 86 名が8次まで参加を続けるという驚異的な参加率を維持している。また 2011 年には新たに 105 名の参加者を加えて研究を継続している。現在、研究の実施は全て終了し、公開データベースの作成をめざして準備作業を進めている。

研究成果

現在、研究で得られた膨大なデータを分析し研究論文の作成中であるが、すでに以下の個別研究論文を公刊(ないし印刷中)している。

- Takagishi, H., Takahashi, T., Yamagishi, T., Shinada, M., Inukai, K., Tanida, S., Mifune, N., Horita, Y., Hashimoto, H., Li, Y. & Kameda, T. (2010). Salivary testosterone levels and autism-spectrum quotient in adults. *Neuroendocrinology Letters*, 31(6), 837-841.
- Inukai, K., Shinada, M., Tanida, S., Takahashi, C., Mifune, N., Takagishi, H., Horita, Y., Hashimoto, H., Yokota, K., Kameda, T., Yamagishi, T. & Takahashi, T. (2010). Salivary alpha-amylase levels and big five personality factors in adults. *Neuroendocrinology Letters*, 31(6), 101-104.
- Takahashi, T., Shinada, M., Yamagishi, T., Inukai, K., Tanida, S., Mifune, N., Takagishi, H., Horita, Y., Hashimoto, H., Li, Y. and Kameda, T. (2010). Stress hormones predict hyperbolic time-discount rates six months later in adults. *Neuroendocrinology Letters*, 31(5), 616-621.
- Yamagishi, T., Hashimoto, H., Cook, K., Kiyonari, T., Shinada, M., Mifune, N., Inukai, K., Takagishi, H., Horita, Y., & Li, Y. (2012). Modesty in Self-Presentation: A Comparison between the U.S. and Japan. *Asian Journal of Social Psychology*, 15, 60-68.
- Yamagishi, T., Mifune, N., Li, Y., Shinada, M., Hashimoto, H., Horita, Y., Miura, A., Inukai, K., Tanida, S., Kiyonari, K., & Simunovic, D. (In Press). Is behavioral pro-sociality game-specific? Pro-social preference and expectations of prosociality. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*.

- Yamagishi, T., Horita, H., Mifune, M., Hashimoto, H., Li, Y., Shinada, M., Miura, A., Inukai, K., Takagishi, H., & Simunovic, D. (2012). Rejection of unfair offers in the ultimatum game is no evidence of strong reciprocity. *Proceedings of the National Academy of Science USA*.
- Hashimoto, H., & Yamagishi, T. (In Press). Two faces of interdependence: Harmony seeking and avoidance of rejection. *Asian Journal of Social Psychology*.

またこれらの個別研究論文に加え、以下の概説論文ないし書籍において、これらの個別研究論文の成果をまとめ、その意義を検討している。

- Chiu, C., Gelfand, M., Yamagishi, T., Shteynberg, G. & Wan, C. (2010). Intersubjective culture: The role of intersubjective perceptions in cross-cultural research. *Perspectives on Psychological Science*, 5, 482-493.
- Yamagishi, T. (2011). Micro-macro dynamics of the cultural construction of reality: A niche construction approach. Pp. 251-308 in M. J. Gelfand, C-Y Chiu, Y-y Hong (eds.), *Advances in culture and psychology*, Vol. 1. Oxford University Press.
- Yamagishi, T. (2011). An institutional approach to culture. Pp. 251-257 in Xiao-Tian Wang & Yan-Jie Su (eds.), *Thus spake evolutionary psychologists*. Peking University Press.
- 増田貴彦・山岸俊男 (2010).『文化心理学(上・下)』倍風館

制度と「生き方」

ここで最後に、「一般サンプル実験」を含む文化班の研究がめざしている方向を、上述の増田・山岸(2010)からの引用を使って紹介することにしたい。

「本書で紹介してきた文化心理学の研究は・・・さまざまな心理プロセスが、特定の文化に特有のまとまりをもって存在していることを明らかにしている。文化心理学で用いられている文化的自己観とか人間観という概念は・・・こうしたまとまり全体を表現する言葉として用いられている。しかし、こうした心理プロセスのまとまりを自己観とか人間観という言葉で表現することにより、しばしば、そのまとまりそのものが狭い意味での自己や思考の説明要因として扱われてしまう可能性がある。・・・こうした解釈を回避するためには、心理プロセス全体をさす言葉として、「生き方」という言葉を使うのが良いのではないかと筆者たちは考えている。日本人や中国人をはじめとする東アジアの人々は相互協調的な生き方をしているのに対して、北米や西欧の人々は相互独立的な生き方をしているのだ、と。」

「こうした、心理プロセスの文化差がまとまりを持って存在していることについての知見が、人間について研究するさまざまな分野の科学者に貴重な材料を提供していることは間違いないだろう。しかし、心と文化の相互構築がどのように維持され均衡状態を導き出すのかについての説明は、・・・ほとんど見られない。こうした現状を打開する一つの途は、社会のしくみと働きを研究の対象とする社会学者に受け入れ可能な、あるいは彼らと共有可能な論理構造を備えた議論を構築することにあるだろう・・・。こうした試みは、社会の変化と文化の変化の関係についての研究の糸口を与えてくれるはずである。これまでの文化心理学は、特定の文化を静的に比較することで、文化間に存在している心理プロセスの違いを明らかにしてきた。しかしこうした静的な比較を繰り返している限り、グローバリゼーションにさらされたさまざまな社会に暮らす人々の考え方や行動が今後どのように変化していくのだろうかとか、変わらないとすれば何が変わらないのかという、社会学者にとっての切実な問題への回答に貢献できるようにはならないだろう。筆者たちは、こうした問題へのアプローチに文化心理学が貢献するためには、生き方の科学を作り出す方向へ向けて、現在の理論的な限界を乗り越えていく必要があると考えている。」

3. お知らせ

2012 年 12 月 8 日、9 日に青山学院大学で第 16 回実験社会科学カンファレンスを開催します。詳しい日程等、詳細は、下記の実験社会科学のホームページをご参照下さい。

皆様のご参加を心からお待ちしております。

第 16 回実験社会科学カンファレンスのお知らせ:

http://www.iser.osaka-u.ac.jp/expss21/workshops/2012/16th_expssconf/index.html

また、2013 年 2 月 16 日～18 日に 2013 Asia-Pacific Meeting of the Economic Science Association (ESA)を開催します。

詳しくは、下記のホームページをご参照下さい。

<http://esa2013tokyo.blogspot.jp/>

4. 編集後記

師走に入り、今年も残すところ一か月になりました。

今回の第 8 号を刊行するにあたっては、文化班の山岸俊男先生にご尽力いただきました。心から感謝申し上げます。次回のニュースレターは、いよいよ最終回、理論班を特集します。

一般の皆様からの御意見や御質問もお受けしております。さらに、何かニュースレターで取り上げてほしい内容等も随時受け付けております。特定領域研究発行元までご連絡下さい。

特定領域研究

発行元 : 大阪大学 社会経済研究所 西條研究室

〒567-0047 大阪府茨木市美穂ヶ丘 6-1

TEL: 06-6879-8582

FAX: 06-6878-2766

E-mail: secsaijo@iser.osaka-u.ac.jp

Web page: <http://www.iser.osaka-u.ac.jp/expss21/>